

寒冷過疎地の古民家再生と移住の諸課題

—真実性と快適性の両立へ向けて—

環境学部 4年 尾前 輝幸

昭和戦後から近年に至るまで、気候条件の厳しい日本海側から、温暖な太平洋側都市部への移住が激しくなっている。しかし、そんな日本海側の過疎地を愛し、大切な居場所と考えている人もいる。本研究では、古民家の保全と再生を絡ませながら居場所や移住の問題を再考する。とくに、古民家の文化財的な真実性と住環境の快適性のバランスに注目する。

文化財指定された古民家の実態 昭和40年代の高度経済成長期は地域開発が進み国土の景観が乱れ、都市と地方の過密・過疎問題が露呈し始めた。文化庁はこれに懸念を抱き、全国緊急民家調査を実施し、多くの町家や農家を文化財指定した。まず国指定重要文化財の一例を取り上げる。大学近隣の重文「福田家住宅」は江戸時代の姿をよく留めている。文化財としての真実性を高い古民家である。しかし、重文であるが故に、現代生活に見合う内部改修が許可されていない。そのため、道路の対面に住宅を新築し、現代生活の快適性（アメニティ）を確保しつつ、考古学的標本となった重文民家を管理している。京都府南丹市美山町の重文「石田家住宅」も居住者不在であり、真実性の高い空き家を公開している。

国からの補助に恵まれた重文とは異なり、自治体指定の民家は維持修理の補助金が少なく、それでいて内部改装も認められていないので、居住者が「指定解除」を求めるケースが出てきている。日野郡内井谷の内藤家住宅は、もともと豪雪の影響で建物が傾いており、2000年の県西部大地震で半壊状態に陥り指定解除となった。いま訪れても民家はなく、空き地になっている。周囲の民家もすべて空き家で、集落は廃村化している。これが日本海側山間集落の現実である。

重伝建と登録文化財の古民家改修 1975年、文化財保護法が改正され、町並み保全の制度（重伝建）が導入された。保全地区内の古民家が外観を維持する限り、内部の改装は自由に行うことが可能となり、これに従う場合、一定額の補助金も用意された。ただし、自治体の町並み保存地区には十分な補助金がない。ついで、1995年の阪神・淡路大震災の影響で導入された登録文化財建造物の制度は、建造物の所有者に保存意欲を奨励するための表彰制度であり、補助金は基本的に平時において発生しないので、内部改装に寛容である。

重伝建及び登録文化財の制度において、民家等文化財建造物の内部の改変は自由であり、民家内部の快適性の向上に期待が持たれたが、事態はさほどに簡単ではない。一例として、兵庫県丹波篠山市の重伝建「篠山」の蕎麦屋を取り上げる。この蕎麦屋の外観は旧城下町の町家らしい外観をよく留めているが、内部は新材のパネルが壁・天井に張り巡らされ、和風木造の空間が失われている。このように、内部の自由な改装は文化財建造物の魅力を大きく損失する危険性があることを肝に銘じるべきだろう。

真実性と快適性の両立—奇跡の集落「竹所」 内部の自由な改装は、古民家のもつ真実性を減少させる。この矛盾をうまく解消したのが、旧東ドイツ出身の建築家、カール・ベンクス氏である。カール氏は新潟県十日町市の限界集落「竹所」に30年近く住み着いて古民家再生を続けている。カール氏の自邸「双鶴庵」は中門造の廃屋を解体・再生したものである。古材を極力再利用して架構を組み直し、天井を取り払って梁組を露出させている。分厚い断熱材・ペアガラス・床暖房で断熱処理を施し、畳ではなく板のフローリングを施し、家具は西洋式で心地よい。こうした工夫により古民家の真実性をアピールしつつ快適性を高めた、新旧融合・和洋折衷の傑作である。

私は昨年12月に十日町市を訪れ、カール氏にお目にかかり、いくつかの作品と工事現場を視察した。松代カールベンクスハウスは、明治末の旅館を再生したもので、柱や梁の露出、日本の家具・建具・古材等、和の意匠をベースとしながらも、ソファやテーブル、冬の寒さを凌ぐ薪ストーブ等を取り入れて、現代的な生活に適応している。また、幸運にも「カールベンクス古民家ゲストハウス」に宿泊することができた。外観は大胆にもドイツ式ハーフティンバーに変わっているが、その場合でも内部の和風木造構法はうまく保存活用している。ここでも和と洋の絶妙なバランスを楽しめる。寒さ対策は万全であり、断熱材などの効果により、ゲストハウスの中ではTシャツ1枚で過ごせた。カール氏の再生古民家を購入希望する移住者は多く、集落人口は十数年で倍増している。わたしの訪問時も、竹所で11軒目の再生古民家「とちのきハウス」を建設中だった。カール氏は自身の設計事務所で後継者を育成中であり、学生の訪問も快く受け入れている。この遺伝子が日本全国にひろまることを願うばかりだ。

雪国のセカンドハウスを探る 研究室の教授はあと一年余りで大学を退職される。大学などに保管している大量の蔵書の処理に苦慮されており、古民家もしくは木造建築を購入して「書庫兼アトリエ」となるセカンドハウスに再生活用することを構想されている。研究室では昨年度の鳥取市河原町T家の土蔵再生計画から始まり、智頭町福原PAに隣接する「みちくさの駅」、岡山県町並み保全地区の大原古町に建つ売物件町家セカンドハウスとなり得る建物の視察を重ねてきた。しかし、売値や改修費用などが予想以上に高額であることから、どの候補も「帯に短し襷に長し」状態で保留状態になっている。移住者の居場所として空き家化した古民家は有力な候補だが、実際に内情を調べると一筋縄ではいかない。カール氏の再生古民家も決

して安価なわけではない。買い手が殺到するのは、彼の作品がその値段にふさわしく、「終の棲み処」として最上級のものと判断されるからだろう。

文化複合体としての民家－ブータンの体験 昨夏訪問したヒマラヤ南麓のブータンは、自給自足の生活を送る寒冷山間過疎地である。山里の調査では旧地主の古民家に宿泊した。ここでは、ナグツァンという旧地主邸宅の大部屋で、母系の大家族とともに、薪ストーブで調理したブータン料理を毎日食べた。市場経済に犯されていない山間部では、有形・無形の伝統文化が複合した民家の存在感に圧倒され、「文化を守る」とはどうあるべきか、日々考えさせられた。その一方で、ブータンでも人口流出が進み、若者たちが海外で働くことが当たり前になってきている。ハ地区やトンサ地区の農村では、中東で働く女性（一時帰国）、アメリカに留学する予定の女性に出会った。そうした国外流出者たちは、渡航ビザの取得や出国後の生活が安寧なものになることを祈って、土地の守護神に祈願する。また、滞在した民家では、高齢者から「娘を日本に連れて帰ってくれ」と真剣に依頼されることもあった。ブータンの文化の素晴らしさを体感すると同時に、過疎の影響で社会と文化が今後どう変化していくのかが気になった。日本海側と似た状況を感じとったからである。